

静岡市の学校飼育動物支援活動を通じて想うこと

山田有仁

1 学校とのかかわり

私は小学校が好きである。狂犬病集合注射会場が郊外の小学校になったりすると、ちょっとうきうきする。今年も油山の松野小学校と、依沢の賤機北小学校が担当会場になって、はらはらと桜が舞う中で、楽しく仕事をさせてもらった。松野小学校の校庭に小さな池が付いた快適そうなアヒル小屋があり、毛艶がいいアヒルが1羽、日向ぼっこをしていた。小学校に小動物がいて、心地よさそうに飼育されていると微笑ましくなる。

小学校が好きな理由は、小学校時代の楽しい思い出が数多くあったからだと思う。

今思えば、生き物に関しての学校の授業や、友達との話題では、いつも中心になっていた気がする。昆虫少年だった私は、夏には多くの昆虫を捕まえて友達に見せたり、標本を作って自由研究にした。獣医師の父親に頼んで理科の授業に数種類の色の違ったニソトリのひよこを学校に持っていき、ひよこは黄色だけではないんだと友達に証明して見せた時には得意満面だった。その頃にハツカネズミも飼っていたが、オスとメス二匹からしばらくするとどんどん子供を生み、30匹以上に増えてしまったのには困惑したものである。

生き物が好きで、身近で接することができる環境の中で育った私は父親のように獣医師になりたいと思い始めた。今思えば、子供時代の生き物と触れ合う経験が「動物の命を託される職業」をめざした事と無関係とは言えないだろう。やがて小動物の開業獣医師になり、しばらくは学校とは無縁だったが、子供が小学生になると再び父兄として小学校に関わるようになった。



3年生になった息子がウサギ小屋の飼育当番になり、数ヶ月して聞かされたことは、子ウサギが産み捨てられて次々と死んでいく現状だった。息子達は「墓掘り当番」になっていた。その頃から、学校には動物の適切な飼い方と生命尊重を教える獣医師の存在が必要だと感じ始めた。そこで、不衛生な飼育小屋の改築、オス、メスの完全隔離、必要に応じた去勢手術等をお願いしたが、予算が取れないとの理由から、期待した改善は得られなかった。動物への愛情を育てる目的の学校飼育が逆効果を生んでいると感じた私は、獣医師としてのジレンマもあり、学校で動物を飼育すべきではないと憤るしかなかった。

2 講習会から学んだこと

平成12年3月、静岡市で日本小動物獣医師会主催の学校飼育動物講習会が開催された。その時に講演していただいた中川美穂子先生、桑原保光先生のお話を聞き、自分の心のもやもやが晴れ、目からうろこが落ちた。それは獣医師としての思考の切り替えだった。

- 1) 学校飼育動物支援は健康管理が主目的ではなく、子供達が動物を可愛いと感じる心を育む支援である。したがって動物を子供達から引き離してはならない。
- 2) 獣医師、並びに獣医師会は学校に対して圧力組織であってはならない、あくまで困っている学校に手を差し伸べる立場であれ。
- 3) 学校飼育動物の健康管理を指導し、子供達の動物介在教育に専門性を持った職業人として参加できるのは獣医師に他ならない。
- 4) 獣医師、学校、自治体で三位一体の協力体制を確立すること。その為には獣医師一人一人が実績を積み重ねること。

講演後、獣医師自らが垣根を取り払い動き出す必要があることを実感した。まず、静岡県獣医師会開業部会の協力のもと、県内獣医師の意識調査、地元の静岡市立小学校全校へのアンケート調査を実施した。その結果、各論はともかく県内の7割強の獣医師が学校飼育動物の支援活動に協力的であること、多くの小学校が獣医師に飼育上のアドバイス、動物疾病時の治療を

求めていることが判ったのである。

3 静岡市の仲間と動き出す

私は静岡支部の開業会員はとてどもまとまりがあると自負している。支援母体を立ち上げる上でこのまとまりが少なからず役立った。組織活動には程度の差こそあれ個人の奉仕意識はつきものであり、それは時間であつたり経費であつたりするが、静岡支部の先生達はとてども寛容で協力的であり、支援活動を進めていく上で大きな収穫だった。

活動開始にあたって、113年6月、6人の先生と学校飼育動物活動推進委員会を作った。早馬先生、増田先生、飯田先生、谷先生、高木先生、そして私である。目的は「静岡市内の学校飼育動物に関わる教師や子供達を支援する具体的方法を検討、実施する。」というものである。委員会は私の病院の医局室を会議場所として夜8:00頃から集合し、活発な意見交換をした。みんながお菓子や飲み物を持ち寄りながら忌憚のない意見を出し合った。時には雑談で横道にそれる事もあったが、それもまた楽しいものだった。話し合いは時に深夜に及ぶこともあった。

この委員会において、次の二項目が決められた。

- ① 学校飼育動物の治療を指定動物病院で無料で行う。
- ② 希望があれば学校に出向き、飼育指導や動物との触れ合い教室を行う。

この二項目は静岡市内の9割にあたる26病院の先生の同意を得て、スタートすることができた。前述したが、組織活動を大切に考える静岡支部の先生達の支援に対する理解力が迅速にスタートできた最大の理由であった。感謝の一言である。

115年度は5校の小学校で「ウサギの飼育、ふれあい教室」を実施した。スタート当時は、6人の委員会メンバーのみの参加だったが、その後266病院の獣医師で構成された「静岡がっこう獣医隊」と名称も新たに、三班に分けた形で全員の先生に参加協力していただいた。それぞれの先生が説明用にウサギのイラストを入れた独自の説明フリップを作り、回を重ねるごとに凝った作品になってきたのは嬉しい驚きだった。多くの先生がこの活動の為に時間を割いて準備をしていることに少なからず感激した。最後に行っている紙芝居は童心社から取り寄せ



た市販品を使用している。女性獣医師の高木先生、石川先生に担当していただいているが、子供達にはとてども好評を得ている。

4 教師との絆、動物介在教育に向けて

学校の先生との出会いも私にとって大きな財産になった。その中でも千代田小学校の中村先生、田町小学校の青木教頭とは強い絆ができた。獣医師の支援活動には学校との連携が不可欠だが、つまるところ先生との連携である。飼育改善を実現させる為には担当する教師の熱意が欠かせない。お二人の先生の熱意は私が支援活動案を出していく大きなモチベーションになっていた。千代田小学校も田町小学校も飼育小屋の改善が実現し、「墓掘り当番」はなくなった。けれども何よりうれしかったのは、

「子供達の動物を観察する日が変わってきたんですよ。とても優しい日になりました。クラスの子供達が仲良くなったんです。弱者へのいたわりも芽生えたようです。」

という先生達からの報告だった。

動物を可愛いと感じる適正飼育は、子供達に教育面で以下のような教育的効果があると報告されている。

- ① 命の大切さを学ばせ、生命尊重や責任感を養うことができる。
- ② 動物への情愛を育成することで、人を思いやる心、共感、感受性を養い、人格の土台作りが期待できる。
- ③ 動物への興味を深めることで、知識欲への刺激、観察力、洞察力、科学的思考が養われる。
- ④ ハブニングへの対応、工夫、判断力、決断力が必要となることから、生きる力を養うことができる。
- ⑤ 動物と触れ合うことで、緊張を緩め、心の



癒しや、人間関係の改善に繋がる。

獣医師が学校の教育面にかかわる必要性については論議の的になることもある。教育は教師に任せておけばよいとの意見もある。しかし、動物が介在する教育に獣医師が蚊帳の外では納得がいかない。傷ついた動物を治療することはもちろん、子供達に動物の生態や触れ合い方を教えることも獣医師の役割であると思っている。H15年に文部科学省が全国の小学校に配布した「学校における望ましい動物飼育のあり方」の中でも、獣医師会や獣医師との連携の必要性が述べられている。将来的にも子供達の動物介在教育に獣医師が指導的立場で関わることを否

定できるものではない。それならば、獣医師が積極的に行動し、教育現場と強い連携が確立できるよう準備を怠らないことが私の持論となっている。

残念ながら、現段階では静岡の自治体や教育委員会は獣医師との連携に積極的ではないようだ。動物愛護の視点から現状の飼育管理体制を視察されると困る、予算的余裕がない、などが理由のようだ。しかし教育機関は、動物との触れ合いから得られる子供達への教育的効果を過小評価していると思う。子供時代に愛情を感じながら生き物と触れ合う経験は、バランス感覚を持った好ましい人間性を育てる為に、教育者が思っている以上に大きな効果を得られると私は考えている。

その意味で、学校と自治体と獣医師会が連携を実現させ動物介在教育に取り組むことが獣医師である私の願いであるが、あせる必要はないと思っている。少しずつ支援活動の実績を積み上げていくことが大切であろう。今後も「静岡がっこう獣医隊」の仲間の一員として、一歩ずつ前進していきたい。そしていつの日か、学校獣医師制度が確立されることを夢見ている。

<社> 静岡県獣医師会会報第28号から転載>

(静岡支部「静岡がっこう獣医隊」代表)

